様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 １６ 日現在

機関番号：８２７０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ１７４６５

研究課題名（和文）共に学ぶ場における発達障害児と典型発達児の他者・自己理解を促進する心理教育的支援

研究課題名（英文）Psychoeducational support to promote self-understanding of children with developmental disabilities and typical development children in a place where they learn together

研究代表者
李　熙馥（Lee, Heebok）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・その他部局等・特任研究員

研究者番号：４０７０８３８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自閉スペクトラム症（ASD）児の自己理解や他者理解の特性を、教師や典型発達（TD）児等の他者との関係性の中でとらえ、ASD児の自己理解や他者理解の発達を促進する要因や支援方法を検討することを目的とした。この研究から、以下の二つの点が示唆された。一つ目は、幼児期のASD児における他者の存在や心的状態を理解する発達は、教師との愛着といった関係性を基盤にして促進される点である。二つ目は、児童期のASD児の自己理解は、交流学級のTD児との関係性が影響を与えることや、TD児との良好な関係形成がASD児の学習意欲の向上・維持や学校生活全般における適応感を高めることにつながることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近年は、様々な特徴をもつ多様性のある人々がともに生きる共生社会の実現が重要な社会的課題である。その共生社会の実現のため、特に学校現場では障害のある子どもと障害のない子どもがともに学ぶインクルーシブ教育システムの充実が求められている。本研究は、学校現場で障害のある子どもと障害のない子どもがともに学ぶ環境の中で、教師である大人や友達と愛着や信頼関係を形成することが、障害のある子どもの発達を促進し、学びの充実や円滑な学校生活を送ることにつながることを示した。この点は、インクルーシブ教育システムの重要性や有効性をさらに確認できた点で意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to consider the characteristics and support methods of self-understanding and others' understanding of children with autism spectrum disorder (ASD) in the relation with other persons such as teacher and typical developmental children(TD). From this study, the following two points were indicated. The first is that the development to understand the presence and mental status of others in early childhood ASD children is promoted on the basis of relationships such as attachment to teachers. Secondly, the self-understanding of children with ASD during childhood was suggested to be influenced by the relationship with children with TD. In addition, it was indicated that the good relation formation with the TD children was connected with improving of the learning motivation of the ASD children and raising the adaptation feeling in the whole school life.

研究分野：発達障害学

キーワード：自閉スペクトラム症　発達　自己理解　他者理解　ナラティブ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2014 年の障害者権利条約の批准を機に、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築が重要な課題となってきている。インクルーシブ教育システムとは、障害のある者と障害のない者が可能な限り同じ場で共に学ぶ仕組みであり、すべての子どもにとって良い効果をもたらすことを目指している（文部科学省、2012）。すなわち、インクルーシブ教育システムは、障害のある子どものみならず、障害のない子どもの成長や発達も促進することにつながる。インクルーシブ教育システムの充実を目指して、これまで交流及び共同学習や、就学先決定の見直し、合理的配慮及び基礎的環境整備等が重要な課題として推進されてきているが、障害のある子どもと障害のない子どもが共に発達する心理面での様子に関する研究は少ない。

心理面における発達といえば、児童期から思春期、青年期にかけて重要な課題となるのが自己理解や他者理解である。特に自閉スペクトラム症（以下、ASD）児は、他者との相互作用及びコミュニケーションにおいて質的な困難さをもっているため、他者を理解し、その他者との関係の中で自分自身を理解していくのに独特な特徴をもっている。そのため、障害のない子どもと一緒に学ぶ時においても、ASD 児がもつユニークな他者理解のため、友達とのトラブル等が生じやすく、ASD 児の学習意欲の低下等にもつながることが予想される。さらに、障害のない子ども（典型発達児、以下 TD 児）も、共感性や道徳性などの他者理解が基盤となる発達を成し遂げる。それらの発達に影響を与えるのは、他者との親しさや他者との体験が自己肯定感に良い影響を与えることが報告されている（楯、2011；片岡ら、2011）。しかし、TD 児に関する研究は、あくまでも同じ障害のない他者との関係性であり、これまでの他者理解や自己理解の特徴や発達に関する研究は、ASD 児と TD 児とが分離された状態で各々の発達がとらえられてきたといえる。

これらの問題意識のもと、本研究では ASD 児の他者理解や自己理解の発達過程を他者との関係の中でとらえることと、TD 児と共に学び、生活する中で ASD 児の他者理解や自己理解の発達を促進する要因に着目した。

２．研究の目的

本研究は、上記の問題意識を明らかにするために、以下の２つを検討することを目的とした。

研究１は、ASD 児の他者理解や自己理解の発達過程を他者との関係の中で明らかにすることであった。特に発達過程をより詳細に検討するため、幼児のＡＳＤ児を対象とし、教師や友達等との他者との関係性の形成の側面から、縦断的に検討を行うこととした。幼児の ASD 児を対象とした理由は、TD 児の場合、他者の心的状態等を理解する他者理解（「心の理論」理解）が発達する時期が 4~5 歳であることから、通常の他者理解が発達する前段階からの発達過程を検討するためであった。

研究２は、小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している ASD 児を対象とし、交流学級における学習や生活を含めた学校生活における ASD 児の心理特徴について検討し、ASD 児の自己理解や他者理解に影響を与える要因について検討することを目的とした。児童期は、他者との関係の中で自分自身についての理解を形成しはじめる時期であり、他者との関係性が重要であることから、小学生の ASD 児の心理特徴について焦点をあてた。また、心理的な困難さを抱く ASD 児については、ナラティブを用いた支援方法の有効性について検討した。

３．研究の方法

研究１は、特別支援学校幼稚部に在籍する 3 歳の ASD 児 1 名を対象とし、2 年間の縦断研究を行った。幼稚部に入学してから教師とどのように関係性を形成し、ASD 児がどのように教師や友達のことを理解していくかに関する過程について直接観察を通して検討した。また、定期的に担当教員と意見交換を行ったり、保護者とも意見交換したりしながら、より広く ASD 児の様子をとらえるように努めた。観察データを A4 用紙に時系列に記録し、その中から関係性形成の過程や、関係性形成による ASD 児の発達的な変化、関係性形成のための教師のかかわり等について分析を行った。さらに、家庭との連携のために行っている保護者と担当教員との毎日の日誌についても分析対象とした。

研究２は、小学校に訪問し、ASD 児の様子や TD 児とのかかわりの様子、担当教員へ聞き取りを行う訪問調査を行った。子どもたちの様子は行動観察をしながら記録し、担当教員への聞き取りは、事前に用意した質問項目に沿って回答を求めた。また、学校において心理的な困難さを抱いている ASD 児への支援については、ナラティブを用いた方法について担当教員と協議しながら実施した。

４．研究成果

研究１は、３歳の ASD 児を２年間にわたり観察した結果、ASD 児と特定教師との愛着関係が形成される過程と、愛着形成による ASD 児の発達的な変化が見出された。2 年間の縦断研究のうち、

中間報告として、8か月の間にみられた、ASD児と教師との関係性形成の過程とASD児の発達的な変化に関する概要は、表１の通りである（※李ら（2019）において掲載されている）。ASD児は、教師を「不特定の第３者」としてとらえていたが、教師がASD児の注意を向けさせ、快の情動を引き出し、接点を探るためのかかわりやＡ児の言動を意味づけるかかわりを行うことを通して、Ａ児の快の情動を引き起こされる経験が蓄積され、ＡＳＤ児と教師との愛着関係が形成された。さらに、教師を心のある他者として理解しはじめる様子や、特定教師から不特定教師へとかかわりの対象が広がる様子もみられた。教師との愛着関係の形成は、ASD児の遊びにおいても質的な変化をもたらしたことが確認され、関係性の形成はASD児の発達の基盤となることが確認された。

表１　A児と教師との関係性形成の過程及びA児の遊びの変容

生活年齢		教師からA児へのかかわり	A児から教師へのかかわり	A児と教師の相互的なかかわり	A児の遊びの様子
3:4:4 3:4:12 3:6:1	第1期	・A児の注意を向けさせ、接点を探るためのかかわり ・A児の言動を意味づけるかかわり	・A児にとって教師は「不特定の第3者」 ・徐々に教師への接近行動が出現		・おもちゃをぐるぐるさせたりする感覚遊びがみられる ・教師からの身体遊びを楽しむ
3:6:7 3:6:21 3:7:6 3:7:18	第2期	・かかわりの質的な変化 ・A児の言動を意味づけるかかわり	・教師への接近行動が増加 ・愛着関係の形成 ・教師への関心や志向性の芽生え	・「抱っこする一抱っこされる」関係の中でA児と教師ともに快の情動を表出 ・A児の言動に対する教師の意味づけによるA児と教師との情動の交流	
3:8:3 3:8:9 3:8:24 3:9:8	第3期	・A児が安心して活動に参加できるように促すかかわり	・教師を安全基地としながら活動に参加	・「抱っこする一抱っこされる」関係の中で、視線を合わせて快の情動を共有	・教師の働きかけを楽しみにして待つ ・おもちゃを介した教師とのやりとり遊びがみられる
3:10:19 3:11:14 3:11:24 4:0:1	第4期	・A児との接点が少なかった教師からのかかわり	・かかわる対象の広がり	・引き続き、「抱っこする－抱っこされる」関係での情動の共有 ・A児の言動に対する教師の意味づけによる情動の共有	・引き続き、教師とおもちゃを介して遊ぶ様子がみられる

注）生活年齢は、A児の行動観察を行った日のA児の生活年齢を記載した（〇歳：〇ヶ月：〇日）。

研究２は、小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍しているASD児に注目し、交流学級や学校生活全般におけるASD児の心理特徴について行動観察や担当教員への聞き取り調査を通して検討した。その結果、ASD児は交流学級での失敗経験を積み重ねることで、学習意欲の低下や学校生活への不適応を起こしていることや、TD児とのトラブルを解決できずに心理的不適応を起こしていること等がみられた。また交流学級におけるTD児との関係が良好な場合は、TD児の前で自分自身の良さや弱さを出しやすく、助け合う関係が形成されることも示唆された。ASD児の中にTD児との良好な関係を築けず、トラブルを起こしてしまい、心理的不適応を起こした時は、自分の経験を振り返り、意味づけるナラティブが有効であることが示唆された。実際、ナラティブを行うことで、ＡＳＤ児の心理的な困難さが軽減され、学習意欲が向上したこともみられた。ナラティブは一人で行うよりも、教師を介しての同じ困難さをもつＡＳＤ児同士で共同構成しながらナラティブを行う方がより有効であることも示唆された。

研究１と研究２における課題や限界点については、以下の通りである。まず、研究１の縦断研究や研究２の調査研究が新型コロナウィルス感染拡大により、継続的に実施することが困難となり、今課題ではより詳細な成果を見出すことができなかった点である。二つの研究とも、学校現場に頻繁に訪問させていただきながら行われる調査であったが、新型コロナウィルス感染拡大防止のため、一斉休業やその後も続くソーシャルディスタンス等により、従来予定していた方法での実施が難しくなった。科研費による今課題により見出された知見を今後より発展させていく予定である。また、研究１や研究２に関する研究成果については、一部しか発表できておらず、今後も研究成果については論文発表等を通して発信していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 李　熙馥・飯島杏奈・村上絵里佳・加藤敦	４．巻 47
２．論文標題 ある自閉スペクトラム症児と教師との関係性形成の過程　－８か月間の記録から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国立特別支援教育総合研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 1ー10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 李　熙馥・田中真理	４．巻 46
２．論文標題 自閉スペクトラム症児が語る自分の経験に関するナラティブの特徴	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国立特別支援教育総合研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 李　熙馥・田中真理	４．巻 45
２．論文標題 自閉スペクトラム症児におけるナラティブの調整―「心の理論」の理解との関連―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国立特別支援教育総合研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 1－12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 李　熙馥・飯島杏奈・村上絵里佳・加藤敦
２．発表標題 ある自閉スペクトラム症児と 教師との関係性形成の過程 －1年間の記録から－
３．学会等名 日本発達支援学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Heebok LEE & Kazuo HONGO
２．発表標題 Narrative co-construction in mother-child with autism spectrum disorder
３．学会等名 19th European conference on developmental psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Heebok LEE and Kazuo HONGO
２．発表標題 Narrative Co-construction in Mother-Child with Autism Spectrum Disorder
３．学会等名 18th European Conference on Developmental Psychology（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関